島根県立大学短期大学部出雲キャンパス
研究紀要　第５巻，211－219，2011

成人看護実習の手術見学における看護学生の目標と学び

石橋　鮎美・三島三代子・別所　史恵

概　　要

本研究の目的は，手術見学における学生の学びを学生自身の目標設定別に分析し，より有意義な手術見学実習となるように効果的な指導を検討することである。手術見学をした学生32名の記述をBerelsonの内容分析を用いて分析した。その後，目標別に学生を分類し学びの内容を抽出した。その結果，目標は実習要項に示している見学の目的に沿っていたが，学びは学生自らの目標設定に必ずしも合致するものではなかった。今後の課題として，術後の患者との関わりの中で学生が手術を想起しながら看護を意味づけできるような指導が必要であること，目標に照らした学びの振り返りを促す働きかけが必要であることが示唆された。

キーワード：成人看護実習，手術見学，看護学生，目標，学び

Ⅰ．はじめに

Ａ大学短期大学部看護学科の成人看護実習（急性期）では，周手術期における看護の理解を深め術後の看護実践に必要な情報を収集することなどを目的とし，可能な限り学生の手術見学を行うようにしている。我々は，手術見学実習で学生が何を学んでいるのか見学後の提出レポートから学習内容を明らかにした（石橋，2010）。その結果，学生の手術見学による学びとして12カテゴリーの学びが抽出されたが，手術室の医療者に注目した学びの記述が多く患者の心身の体験に注目した学びの記述は少なかった。氏家は，周手術期看護の概念は「手術を受ける患者を中心において，看護が専門的に患者の術前，術中，術後に体験するさまざまな変化を予測し，対処できるように，プロセスに沿った看護を明確にしたものである」（氏家，2007）と述べている。つまり，周手術期とは手術を軸として患者が体験する一連の経過であり，看護者は先々に起こりうることを予測しながら，その時々の個々のニーズに沿った看護を展開する必要がある。このような，患者を中心においた周手術期看護を実践するためには，手術を受ける患者の急激な身体的・心理的反応に関心を向け，患者の身に起こっていることやこれから起こるであろうことを理解できていることが望まれる。手術見学により受け持ち患者の手術を目の当たりにすることは，学生が患者の心身の体験を理解するのに絶好の機会である。しかし，我々の研究（石橋，2010）では，患者の体験に注目した学びの記述は少なく，学生への手術見学に対する動機づけに工夫が必要であることが明らかとなった。

学生は，手術見学の前に各自で見学の目標を設定してから実習に臨んでいる。酒井は「人は経験によって学ぶと言われるが，人が経験によって学ぶのは，唯，単に何かを経験するからではなく，能動的意識が体験に意味を与えていく」（酒井，2000）と述べており，学生の目標の持ち方は，学びの内容に影響している可能性があると考えられた。

そこで，本研究では，より有意義な手術見学実習に向けての示唆を得るために学生自身の目標と学生が学びとして自覚した内容（記述）との関係を検証する。

* 本研究は島根県立大学平成21年度特別研究費の助成を受けて実施した。

Ⅱ．手術見学実習の概要

１．見学する手術

原則として受け持ち患者の手術を見学する。すでに手術を終えて回復過程にある患者を受け持つ学生や受け持ち患者に手術見学の同意が得られない場合は，学生が受け持ち患者の身に起こったことと関連づけられるように，受け持ち患者と近い術式の患者の承諾を得て手術見学を行う。

２．手術見学当日の学生の動き

手術当日は入室前の手術患者のもとに挨拶に行き，術前の患者の状態を確認する。学生は，成人看護実習（急性期）初日に手術室内で，臨床指導者から手術室の構造と手術見学の方法について30分程度のオリエンテーションを受けている。見学当日は一人で手術室に入り，手術着に着替えた後，患者の入室を迎える。手術中は外回り看護師の指導のもと見学を行う。手術後は患者の退室を見届けてから，着替えを済ませて病棟に戻り，帰室した患者の状態を観察する。

３．手術見学の目的

手術見学にあたり学生には（１）周手術期における看護の目的や内容の理解を深める（２）手術後の看護実践に必要な手術室における患者の身体的・心理的反応や手術・麻酔等に関する情報を収集する（３）手術室における看護の目的・内容（実際）・看護師の役割についての理解を深めるという３つの目的を実習要項で示している。また，学生自身が見学の目標を設定して手術室実習に臨むように指導している。

４．課題レポート

「手術見学の目標と評価・感想」をＡ４版用紙１枚程度にまとめて，見学後３日以内に提出するように求めている。

Ⅲ．研究方法

１．対象

平成21年度Ａ大学短期大学部看護学科の成人看護実習（急性期）で手術見学を行った44名中，研究に協力が得られた37名。

２．分析方法

言語的に記述された内容（表出されたコミュニケーション内容）を客観的，体系的，数量的に記述するための調査技法内容としてBerelsonの内容分析（Berelson，1957）を用いた。方法論については舟島が推奨している方法（舟島，2007）に従い，以下のように行った。目標と学びの抽出については，記述内容の出現を算出するための「記録単位」を，学生が立てた目標および手術見学で学習した内容の，それぞれ１つを含む一文とした。また，記録単位を性格づけるにあたって１人のレポート全体を「文脈単位」とみなした。これは，記録単位である学びの内容は学生の記述全体をよく吟味しない限り正確に理解できないためである。

学生の記載内容を可能な限り忠実に抽出した「学び」についての記録単位を意味内容の類似性に基づき分類し，サブカテゴリー化した。さらにそれを内容の性質でカテゴリー化して命名し，カテゴリーに分類された記録単位を算出した。目標についても同様に行い，目標別に学生を分類し学びの内容を再抽出した。分析の信頼性と妥当性を確保するために何度も記述内容を読み返し分類がふさわしいものであるのか確認しながら分析した。そして全員の合意が得られるまで検討を重ねた。

３．倫理的配慮

本研究は島根県立大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。学生には調査協力は自由意思であること，成績には一切影響しないこと，プライバシーを遵守すること等について文書と口頭で説明し同意書の署名を得た。同意書は２枚作成して研究協力者（学生）用と研究者用で保管できるようにし，研究者用の同意書は回収箱を設置して回収した。

Ⅳ．結　　果

分析対象となった37名のうち，レポートに目標の記載がなかった５名を除いた32名の記述

（32文脈単位）を分析した。手術見学の目標として，56記録単位が抽出され８カテゴリーに分けられた（表１）。手術見学にあたり学生は［手術室看護師の役割を理解する］［手術・麻酔における患者変化を理解する］［外回り看護師の役割を理解する］［心理的援助の実際を理解する］［解剖・病態を目で見て理解する］［術中看護技術の実際を学ぶ］［手術の過程．麻酔を理解する］［他職種との連携を知る］という目標を立てていた。また，学びについては319記録単位が抽出され，43サブカテゴリー，12カテゴリーに分類された。学びは【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【チーム医療】【手術室看護師の役割】【医療安全】【麻酔】【無菌管理】【看護観の深まり】【周手術患者の理解の深化】【術中看護技術】【医療技術】【見学による体感】であった。学びの詳しい内容については表２に示す。また，目標別の学びについて表３に示す。以下，目標のカテゴリーを［　］で，学びのカテゴリーを【　】で表す。

１．［手術室看護師の役割を理解する］

この目標を立てていた学生は20名（35.7％）であった。学びの内容は【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【手術室看護師の役割】【チーム医療】【医療安全】【麻酔】【無菌管理】【看護観の深まり】【周手術患者の理解の深化】【術中看護技術】【医療技術】【見学による体感】の順に記述数が多く12カテゴリーであった。

２．［手術・麻酔における患者変化を理解する］

この目標を立てていた学生は15名（26.8％）であった。学びの内容は【手術室看護師の卓越したスキル】【チーム医療】【医療安全】【手術室看護師の役割】【心理的援助】【麻酔】【無菌管理】【術中看護技術】【看護観の深まり】【医療技術】【周手術患者の理解の深化】【見学による体感】の順に記述数が多く12カテゴリーであった。

３．［外回り看護師の役割を理解する］

この目標を立てていた学生は7名（12.5％）であった。学びの内容は【手術室看護師の役割】【手術室看護師の卓越したスキル】【チーム医療】【医療技術】【医療安全】【心理的援助】【看護観の深まり】【無菌管理】【麻酔】【周手術患者の理解の深化】【術中看護技術】【見学による体感】の順に記述数が多く12カテゴリーであった。

表１　手術見学の目標

カテゴリー	記録単位数
手術室看護師の役割を理解する	20(35.7%)
手術・麻酔における患者変化を理解する	15(26.8%)
外回り看護師の役割を理解する	7(12.5%)
心理的援助の実際を理解する	5(8.9%)
解剖・病態を目で見て理解する	4(7.1%)
術中看護技術の実際を学ぶ	2(3.6%)
手術の過程．麻酔を理解する	2(3.6%)
他職種との連携を知る	1(1.8%)

４．［心理的援助の実際を理解する］

この目標を立てていた学生は５名（8.9％）であった。学びの内容は【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【チーム医療】【手術室看護師の役割】【医療技術】【周手術患者の理解の深化】【医療安全】【麻酔】【術中看護技術】の順に記述数が多く９カテゴリーであった。

５．［解剖・病態を目で見て理解する］

この目標を立てていた学生は４名（7.1％）であった。学びの内容は【周手術患者の理解の深化】【手術室看護師の役割】【チーム医療】【麻酔】【心理的援助】【手術室看護師の卓越したスキル】【医療技術】【医療安全】【無菌管理】【看護観の深まり】の順に記述数が多く10カテゴリーであった。

６．［術中看護技術の実際を学ぶ］

この目標を立てていた学生は２名（3.6％）であった。学びの内容は【医療技術】【チーム医療】【心理的援助】【医療安全】【麻酔】【周手術患者の理解の深化】【手術室看護師の役割】の順に記述数が多く７カテゴリーであった。

７．［手術の過程．麻酔を理解する］

この目標を立てていた学生は２名（3.6％）であった。学びの内容は【医療技術】【チーム医療】【心理的援助】【医療安全】【麻酔】【周手術患者の理解の深化】【手術室看護師の役割】

表2　手術見学の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例
手術室看護師の卓越したスキル(60)	能率的な器械出しの技術　(19)	手術の流れを把握した効率の良い的確な器械出しをしていた
	万全な準備をする力(10)	手術がスムーズに実施できるように事前準備をしている
	外回り看護師の調整力(10)	外回り看護師は他職種と連携を取りながら手術チームの調整役を担っている
	効率的な行動力(5)	様々な事を手術の経過を見ながらテキパキとこなす
	先を予測した行動(5)	外回り看護師は常に先々を予測した行動をしている
	より専門的な知識(3)	一歩先を予測しながらの器械出しは知識がないとできない
	多角的なアセスメント力(3)	ただ出血量を測るのではなくアセスメントが大切
	柔軟な判断力(3)	予定変更時でも落ち着いて柔軟に対応することが求められる
	体調の自己管理(2)	手術には体力と精神力が必要
心理的援助(45)	手術室での丁寧な説明と声かけ(19)	麻酔がかかるまで優しい声をかけ不安軽減のために丁寧な説明をする
	入室時の不安緩和への支援(12)	不安軽減のためのマスクを外した入室時の出迎えは患者に安心感を与えていた
	術前からの不安緩和への支援(8)	術前訪問に行った顔見知りの看護師が傍にいてくれると患者の不安は軽減できると感じた
	術後のねぎらい(4)	麻酔からの覚醒状態の観察と少しでも安心感を与えるために手術が無事に終了したという声かけをしていた
	患者の立場に立った配慮(2)	看護師は，不安を少しでも軽減させようと，患者の立場に立ち，考え配慮している
チーム医療(43)	手術室での協働　(20)	周りのスタッフと連携して協力していかなければ手術は絶対に成功しない
	病棟と手術室の連携による継続看護(11)	術中と術後は密に関連しているため手術室と病棟の連携が大切
	各自の責任ある役割の遂行(9)	それぞれの役割を的確に全うすることで，より安全で円滑な手術が実施できる
	チーム一体となって手術の成功を目指す姿勢(3)	全員が手術を無事終了するというゴールにむけてそれぞれの役割を担っている
手術室看護師の役割(40)	外回り看護師の役割(30)	手術がスムーズに進むための外回り看護師の幅広い役割(観察，出血量測定，検体処理，器械出し看護師や術者への協力，褥瘡・神経麻痺の予防，記録)
	器械出し看護師の役割(4)	器械出し看護師の役割(直接な医師の介助や手術野での患者さんの看護)
	手術室看護師の役割(4)	手術室看護師は短い間に患者さんが安全に確実に安心して手術が受けられるように援助しなければいけない
	外回り看護師と器械出し看護師の役割の違い(2)	外回り看護師と器械出し看護師の役割の違いがわかった
医療安全(33)	ガーゼの残留確認(11)	実際に腹部からガーゼが出てきたことによりガーゼカウントの重要性を理解した
	患者の誤認予防(10)	声に出して全員で患者・術式の念入りな確認を行う
	術中合併症の予防(9)	無理な圧迫とならないような体位固定をしていた
	転倒転落予防(2)	退室時は循環動態の変動・転落に十分配慮しハチウェイ移動を行う
	スタンダードプリコーションの遵守(1)	スタンダードプリコーションにのっとった感染管理がされていた
医療技術(20)	手術手技(14)	胃の切除は自動吻合器で一瞬であったが，大網の処理，周囲の動静脈の処理は緻密な作業で時間がかかるものだった
	高度な医療技術(6)	内視鏡手術は負担が少ない手術で医学の進歩はすごい
麻酔(18)	麻酔導入時・覚醒時の看護(12)	硬膜外麻酔時の体位保持・麻酔覚醒時の観察方法がわかった
	麻酔の進行と患者の反応(6)	麻酔導入後は本当に眠るように意識がなくなっていく
看護観の深まり(16)	生命の尊厳(10)	生命の尊さを感じるとともに，医療技術の発展により，助かる命，つながる命があるという事実に感動を覚えた
	生命を守る責任(4)	患者は生命を第三者にゆだねているため当然，不安や恐怖があり，手術を行う医療従事者は責任感を忘れてはならない
	看護の視野の広がり(2)	手術室の看護師と病棟の看護師では働いている環境や内容は違っているけど，患者のことを思い，最善を尽くしているということは同じだった
周手術期看護の理解の深化(15)	術後看護との関連性(10)	胃のほぼ2/3くらい切除しないとがんは取り除けないものなのだと実感し，残胃の小ささと機能低下によるその後の苦痛を理解した
	患者の身体症状との関連性(3)	臓器の実物を見ることでイレウスの原因を理解した
	患者心理の理解の深まり(2)	術後の患者の笑顔や涙を見て手術に対する計り知れない心理があることを理解
無菌管理(14)	無菌状態の保持(10)	手術室という狭い空間の中で清潔区域を守りながら的確な看護を行う
	無菌操作(4)	無菌操作の手技がわかった
術中看護技術(10)	術中のバイタルサインの観察(8)	Aラインや体温センサー付き膀胱留置カテーテルを使用した持続的なモニタリング方法であった
	ガーゼカウント(2)	ガーゼカウントの手順がわかった
見学による体感(5)	手術室の雰囲気(3)	手術室は和やかな雰囲気だった
	病巣の確認(2)	触ってみると，胆石は本当に硬く石そのものだった

表３　手術見学の目標毎の学び

目標のカテゴリー（記録単位）	学びのカテゴリー（記録単位）
手術室看護師の役割を理解する(20)	手術室看護師の卓越したスキル(47) 心理的援助(35) チーム医療(27) 手術室看護師の役割(26) 医療安全(24) 麻酔(13) 無菌管理(11) 看護観の深まり(11) 周手術期看護の理解の深化(9) 術中看護技術(8) 医療技術(7) 見学による体感(1)
手術・麻酔における患者変化を理解する(15)	手術室看護師の卓越したスキル(42) チーム医療(22) 医療安全(19) 手術室看護師の役割(18) 心理的援助(16) 麻酔(13) 無菌管理(9) 術中看護技術(8) 看護観の深まり(6) 医療技術(6) 周手術期看護の理解の深化(5) 見学による体感(4)
外回り看護師の役割を理解する(7)	手術室看護師の役割(11) 手術室看護師の卓越したスキル(10) チーム医療(10) 医療技術(8) 医療安全(7) 心理的援助(6) 看護観の深まり(4) 無菌管理(3) 麻酔(2) 周手術期看護の理解の深化(1) 術中看護技術(1) 見学による体感(1)
心理的援助の実際を理解する(5)	手術室看護師の卓越したスキル(12) 心理的援助(11) チーム医療(10) 手術室看護師の役割(7) 医療技術(5) 周手術期看護の理解の深化(2) 医療安全(1) 麻酔(1) 術中看護技術(1)
解剖・病態を目で見て理解する(4)	周手術期看護の理解の深化(6) 手術室看護師の役割(5) チーム医療(5) 麻酔(4) 心理的援助(4) 手術室看護師の卓越したスキル(3) 医療技術(3) 医療安全(2) 無菌管理(2) 看護観の深まり(1)
術中看護技術の実際を学ぶ(2)	医療技術(6) チーム医療(5) 心理的援助(3) 医療安全(2) 麻酔(2) 周手術期看護の理解の深化(2) 手術室看護師の役割(1)
手術の過程・麻酔を理解する(2)	医療技術(6) チーム医療(5) 心理的援助(3) 医療安全(2) 麻酔(2) 周手術期看護の理解の深化(2) 手術室看護師の役割(1)
他職種との関わり方を見る(1)	手術室看護師の卓越したスキル(2) 手術室看護師の役割(2) 心理的援助(2) チーム医療(1)

の順に記述数が多く７カテゴリーであった。

８．［他職種との連携を知る］

この目標を立てていた学生は１名（1.8%）であった。学びの内容は【手術室看護師の卓越したスキル】【手術室看護師の役割】【心理的援助】【チーム医療】の順に記述数が多く４カテゴリーであった。

Ⅴ．考　　察

１．目標設定の傾向

学生自身の目標設定の傾向を概観すると，学生は実習要項に示された手術見学の目的に沿った目標を立てていることが明らかとなった。学生の立てていた８つの目標は，実習要項で示している（１）周手術期における看護の目的や内容の理解を深める（２）手術後の看護実践に必要な手術室における患者の身体的・心理的反応や手術・麻酔等に関する情報を収集する（３）手術室における看護の目的・内容（実際）・看護師の役割についての理解を深めるという３つの目的に沿っていた。学生は手術見学の目的を意識することができており，その目的を達成するためのステップとなる目標を自分なりに設定することができている。先行研究（石橋，2010）では，学生の関心をいかに患者の体験に向けさせるかが課題となった。そこで，実習要項に示す目的に，患者の手術体験を共有することが意識づけられるような内容を，さらに加えることで患者の理解につながる動機づけができるのではないかと考える。

２．目標に対する学び

学生の目標のカテゴリーを見ると［手術室看護師の役割を理解する］という目標が全体の35.7%と最も多く，次に多かったのが［手術・麻酔における患者変化を理解する］で26.8%であった。「患者の変化を理解すること」が，目標として比較的多く挙げられていることから患者の身に起こることを理解しようという能動的意識を持っている学生もいたと推察される。しかし，手術見学後のレポートに記述されていた各目標に対する学びは【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【チーム医療】といった医療者に焦点を当てた内容が大半を占めていた。

大谷は「看護師と行動を共にする１日実習では術中の看護に対する学びにとどまり，術前から患者とかかわり，患者と共に手術室に入室・退室するという受け持ち患者の手術見学をする実習では術後を踏まえて術中の看護を捉えることができる」と述べている（大谷，2006）。A大学短期大学部看護学科の成人看護実習（急性期）では，周手術期看護を意識させるため，受け持ち患者の手術見学を原則としている。しかし，近年は，受け持ち患者であっても手術前日に入院してきた患者を受け持つことが多く，また，受け持ち患者以外の手術見学をせざるを得ない場合もある。受け持ち患者との関係が十分に確立されないままでの手術見学となりやすいため，大谷の述べる１日実習のような術中の看護に対する学びにとどまりがちなのではないかと考えられる。ことに，学生の多くは専門性の高い手術室看護を目の当たりにして，卓越したスキルを持ち第一線で活躍する看護師や，個人の責任が基盤にある絶妙なチームワークに圧倒されがちである。その結果，強く印象に残ったそれらの内容を学びとして記述していると推察された。ジョン・デューイは「教育者が教えることと学ぶこととは経験の再構成の連続的な課程である」（ジョン・デューイ，2004）と述べているが，患者の体験に関心を向けさせるには，術後の患者との関わりの中で術中の患者の状態を想起させ，学生と一緒に振り返りながら意味づけしていく必要がある。学生の見たことを再構成させる関わりは，途切れていた周手術期のプロセスの統合を促し，学生の患者理解を深める手立てとなると考える。

さらに，その他の目標と記述された学びの内容をみてみると［外回り看護師の役割を理解する］という目標を立てた学生は，外回り看護師に関する学びの記述を含む【手術室看護師の役割】に関するという学びが最も多かった。また，［解剖・病態を目で見て理解する］という目標を立てた学生も【周手術期患者の理解の深化】の学びが一番多く，術後看護や患者の身体症状との関連性について学習をしており，目標

に沿った記述となっていた。しかし，それ以外の［心理的援助の実際を理解する］［術中看護技術の実際を学ぶ］［手術の過程・麻酔を理解する］［他職種との連携を知る］の目標においては，学生が自ら立てた目標と学びの内容が必ずしも一致していなかった。

藤岡は「実習では仮の目標が設定されるとしても状況の変化の中で目標自体が変化し，そのときどきで新たな目標として設定し直される」と述べている。さらに，「何が学習されたのか前もって立てられた目標に照らし合わせて確かめられるばかりでなく学習のプロセスを振り返ってはじめて確認できるものも多い」とも述べている（藤岡，1997）。手術見学は多くの学生にとって未知のものであり，予測していなかったことを見聞する機会であると推察される。その中で，学生の興味や関心は将来のモデルである医療者の動きに向けられがちであり，学生は自らの目標を見失う傾向にある。当初の目標とは異なる学びも大切な学びではあるが，数少ない貴重な手術見学の機会を活かすためには，学生自身の目標を振り返らせる働きかけも必要である。現場に居合わせることで感じた生きた学びも大事にしつつ，発問などで，学生自身が学ぼうとしていた目標についての振り返りを促すことは周手術期の学びを深めるのに効果的であることが示唆された。そうした関わりにより，手術見学の目的に応じた学びについて学生自身が再確認し，学習の整理をし直す手助けをすることができると考える。

３．研究の限界

本研究は，学生が提出したレポートの記述内容から手術見学の学びを分析しており，学生の学習が記述として表現されていないものに関しては分析できていない。したがって学生の学び全てについて明らかに出来ているとは言い切れない。また，Ａ大学短期大学部看護学科の行っている手術室実習での学びの分析であり，一般化は難しい。しかし，手術患者や手術室スタッフの協力のもと実施させていただいている貴重な手術見学実習をさらに活かしていくための効果的な指導について示唆が得られた。今後も工夫を重ね，周手術期看護についての学習が深められる実習指導を検討していきたい。

Ⅵ．結　　論

1．学生は実習要項の目的に沿った目標を立てていた。患者との手術体験の共有が意識づけられる内容を，実習要項の目的に加えることで患者・家族の理解につながる動機付けを強化できることが示唆された。
2．見学前には周手術期に身を置いている患者の理解を深めようという能動的意識を持っていた学生もいたが，実際の見学では手術室で展開される医療に関心が向きがちで，学習内容として患者中心の理解が少なかった。
3．患者の体験については，術後の患者との関わりの中で，術中の患者の状態を想起させ，振り返りながら意味づけする必要がある。学生の見たことを再構成させる関わりは途切れていた周手術期のプロセスの統合を促し，学生の患者理解を深める手立てになると考える。
4．学生が自ら立てた目標と学びの内容が必ずしも一致していないため，自分が学ぼうとしていた目標についての評価はどうだったのか振り返りを促す発問をするなどの働きかけも必要である。

謝　　辞

手術という危機的状況に立たされる中，学生の手術見学を承諾して下さった患者の皆様，学生の指導を快く引き受けて下さった病院スタッフ一同様，そして研究に協力して下さった学生の方々に心から感謝申し上げます。

文　　献

藤岡完治・堀喜久子（2002）：看護教育の方法（第１版），10-23，医学書院，東京
舟島なをみ（2007）：質的研究への挑戦（第２版），40-79，医学書院，東京.
石橋鮎美・三島三代子・別所史恵・狩野芳子・若槻千春（2010）：成人看護実習の手術見学における看護学生の学び，島根県立大学

短期大学部出雲キャンパス研究紀要，４，81-88.
ジョン・デューイ：Experience and Education /市村尚久（2004）：経験と教育（第１版），143-145講談社，東京
大谷則子・堀之内若名・中井裕子・榎本麻里（2006）：手術室見学実習における学び－二つの実習形態の比較検討による考察－，OP nursing，21（６），98-107
酒井明子（2000）：周手術期看護における見学と実習のコンテクストの理論的検討－活動システムモデルを用いて－福井医科大学研究雑誌，1（1）：219-232
氏家幸子（2008）：成人看護学Ｂ急性期にある患者の看護Ⅱ周手術期看護（第３版），4-7，廣川書店，東京

Student Nurse's Learning and Target in Operation Visit of Adult Nursing Practice

Ayumi Ishibashi, Miyoko Mishima and Fumie Bessho

Key Words and Phrases：Adult nursing Practice, Operation visit, Student nurse, Target, Learning